

### 3 / 23 集会決議

## 無実のゴビンダさんに無罪判決を！！ 司法の外国人差別と冤罪を問う市民集会

きょう、3月23日は、無実のネパール人被告、ゴビンダ・ブラサド・マイナリさんが、身にまったく覚えのない強盗殺人という重罪で逮捕されてから、6周年にあたります。94年に来日したゴビンダさんは、故国に残した家族の幸せのために、慣れない日本で、一生懸命に働いてきました。そのお金でカトマンズに建てていた家がほぼ完成し、この年の秋には、ヒンドゥーの大きな祭、ダサインに間に合うよう、たくさんのお土産をかかえて帰国する予定でした。その時、降ってわいたように、不幸な事件に遭遇しました。

ビザの期限が切れていたため、逮捕されることを承知で身の証をたてるために自ら警察に出頭したゴビンダさんは、別件逮捕され、暴力的な取り調べを受けたにもかかわらず、一貫して否認しました。しかし、何ら物証もないまま検察は起訴に踏み切りました。

2000年4月14日、東京地裁刑事第11部（大淵敏和裁判長）が無罪判決を下したのは、当然のことと言わなければなりません。しかし、検察の控訴とともに、ネパールに送還直前だったゴビンダさんを再び勾留するという前代未聞の決定が行われ、彼は無罪判決を受けながら、一度も自由を回復することなく、いまなお、東京拘置所の狭い独房で孤立した拘禁生活を強いられています。

私たちは、無罪勾留を受けた人がゴビンダさんだけではなく、他の外国人が同様に不当な勾留を受けた事実について、本集会で聞きました。こうした自由の束縛は、日本の司法が外国人に対して差別的人権侵害を行っているという疑念を呼び起こし、国際社会に於ける日本の名誉すら傷つけるものです。また、無罪になった者が何ら新しい証拠もなく「罪を犯したことを疑うに足りる相当な理由がある」（勾留特別抗告に対する最高裁第2小法廷の決定）とされるのでは、裁判によって無実の者が救済される、という司法への信頼が根底から揺らぐこととなります。

2000年12月22日、東京高裁第4刑事部（高木俊夫裁判長）が下した逆転有罪判決は、裁判を始める前から有罪の予断をもって下されたずさんなものであり、一審判決が証拠を総合的かつ緻密に判断しているのと対照的です。

本日の集会には、ゴビンダさんの妻、ラダ・マイナリさんも参加されました。ネパールを発つ時ラダさんは、2人の幼い娘から、必ずお父さんを連れて帰ってきてと頼まれたそうです。また、高齢のご両親も息子の帰りを待ちわびています。

私たち、集会参加者は、最高裁第3小法廷が、慎重かつ迅速に事件を精査し、無実の者には無罪判決を、という当然の判断を下し、ゴビンダさんを1日も早く、ご家族のもとに帰していただきたいと思います。そうしてこそ、司法への信頼も、すみやかに回復できると信じるものです。

2003年3月23日 集会参加者一同